

鈴木胤 『論語参解』の訓読に於ける国語の語法と字訓

石川 洋子

一 はじめに

鈴木胤は平成十九（二〇〇七）年が没後一七〇年に当たる。それを記念して、鈴木胤学会では尾崎知光氏による講演「鈴木胤と時枝学説」が六月に開催された。また、名古屋市博物館では、十月二十四日から十一月二十五日まで常設展示室での「鈴木胤 ―人と学問―」の展示と、十月二十七日に桐原千文氏による「鈴木胤と尾張の国学」のはくぶつかん講座、さらに、十一月三日に尾崎知光氏による「活語研究と鈴木胤」の記念講演会が開催された。

鈴木胤の真骨頂はやはり『言語四種論』『活語断続譜』『雅語音声考』等の国語学の業績であることは周知の事実である。しかし、鈴木胤の全体像を考へるとき、本居宣長も一目置いた胤の『大学参解』『論語参解』『改正讀書點例』等の漢学の業績も忘れてはならないものである。

この論文では、『論語参解』の訓読に於ける国語の語法、また、「浸潤之諧」〔顔淵第十二〕第六章〕の「シコヅリ」といった字訓、さらに、符号を使用した独自の訓み方について調査検討するものである。

その結果、次のことが言へると思ふ。『論語参解』の訓読は、それまでの漢学者が思ひ至らないやうな語彙、語法が使用されてゐる。さらに、『論語参解』の訓読は『論語』の原文の意味をより正確に理解できるやうにと、服の国語学の素養を駆使して、古典語の助詞・助動詞を添加して意味を補ひ明確にしてゐる。『論語参解』の訓読はこまやかな古典語の配慮に基づいた訓読法である。

なほ、本稿において『論語参解』を引用する場合には、以下の要領で行ふこととする。

- 一、『論語参解』のテキストは『大学参解・論語参解』（鈴木服著作集經學篇²）の影印本を使用する。
- 一、『論語参解』の引用文は、カギ括弧に括って示す。
- 一、引用文の下の括弧内の漢数字は、それぞれその頁数・行数を示す。引用文が割注の場合は、括弧内の頁数・行数の漢数字の下に、割注の左側にあるものは左、右側にあるものは右と示す。
- 一、引用文において、漢字の正字体は正字体で、異体字は現行字体に直す。
- 一、仮名の異体字は現行の片仮名の字体に直す。
- 一、『論語参解』の句切りの符号は、すべて現行の読点の符号「、」に替へた。

二 国語の語法

『論語参解』の訓読には一般的な漢文訓読では使用されない国語（古典語）の語法が使用されてゐる。それを後藤点と比較して、次にA～Dの四つに分けて説明する。後藤点には江戸時代後期に最も流行した訓法であるので、ここでは一般的な漢文訓読法の代表として使用する。後藤点には片假名の総ルビが付いてゐる『嘉永新刻 論語 後藤点 片假名附』を使用する。

A 主格の「の」が上にあるとき、結びが連体形になる和文の語法

この語法は『枕草子』冒頭の「紫だちたる雲の細くたなびきたる」、「螢の多く飛びちがひたる」でも見られるやうに和文の語法である。この語法が『論語参解』の訓読に使用されてゐる。次の通りである。

「禮_レ之用_テ和_レ為_レ尊_ト」（一八・七、「学而第一」第十二章）

この訓読は「禮ノ和ヲ用テ貴ト為ル」であり、「禮ノ……為ル」と主格の「の」が上にあるので、結びをサ変動詞「為」の連体形「する」で止めてゐる。

この原文の割注には「禮_ハ、用_テ和_レ為_ト貴_ト云語アリテ、」（一八・八・右）とあり、「禮ハ」と主格の「は」を使用したときは、「す」と終止形で結んでゐる。割注から見ても眼が意識的に原文を「禮ノ……為ル」と訓読し、和文

の語法を使用してゐることは明らかである。晩年、尾張藩の藩校明倫堂の「国学教授並」に任ぜられて『日本書紀』・『古今和歌集集』等を講じた服の面目躍如たる訓読ではないかと思はれるところである。

この原文については以前拙論で触れたが、古注と新注で訓読が相違し、後藤点は「禮之用、和爲貴」と訓む。さらに参考までに荻生徂徠・小川環訳注『論語徴1』を示すと、「禮は和を用ふるを貴しと爲る」とある。「之」字は不読であり、この和文の語法を使用してゐない。

B 敬語法

『論語参解』の主な敬語法については拙論ですでに論じた。しかし、丁寧語の「はべり」についてはそのとき触れてゐないのでここで論ずることとする。『論語』の中の「侍」字は全部で五例あり、『論語参解』でその五例の訓読を示すと、次の通りである。

- 1 「顔淵季路侍」(七三・五)、
- 2 「侍食於君」(一三七・六)、
- 3 「閔子侍側」(二四五・九)、
- 4 「侍坐」(二五一・六)、
- 5 「侍於君子」(二二三・一一)、

右の如く『論語参解』では五例中4を除いた四例を古典語のラ行変格活用動詞「侍り」と訓む。4は「侍坐」を

熟語として音読みしてゐる。

後藤点は1と3の二例を「侍す」と漢語サ変動詞で訓み、2と4の二例を熟語として音読する。2は「ジシヨクスルニ」、4は『論語参解』と同じく「ジザス」である。5の一例のみ「侍り」と訓んでゐる。

※後藤点では「ジシヨクスルニ」を「侍食」字の左側に小書きされてゐるが、本稿での説明では小書きしないで引用する。なほ、片仮名の小書きは原文の漢字の左右の側にあるがここでは区別しない。以下同様。

後藤点と比較すると、『論語参解』は訓読に於いて丁寧語「侍り」を使用する。音読するのは熟語の場合である。

C ク語法の語彙

ク語法の語彙（「いはく」と「のたまはく」は除く）についても拙論で触れた。⁽⁸⁾ここではそこでの語彙を補足し、『論語参解』の頁数と行数を新たに付け加へて、次に示す。片仮名は小書きされてゐるが、ここでは小書きせず字と同じ大きさで示す。

「問ハク」(三三二・一一、二三九・八)、「観マク」(四一・七)、「ステマク」(四五・六)、

「勿マク」(七八・五)、「末ラマク」(二三一・八)、「絶マク」(二六〇・八)、

後藤点は右の原文を、それぞれ「トフ」(二箇所とも)、「ミルコトヲ」、「ステント」、「ナカラント」、「ナキ」、「タヽント」と訓み、ク語法を使用しない。『論語参解』ではク語法を多用してゐると言へる。

D 漢文の言回し

漢文訓読には「況や……をや」とか「……のみ」等といふ漢文独特の言回しがある。『論語参解』にももちろん「何爲」(三三・六)、「豈不爾思」(二二九・八)、「不如仁人」(二六三・五)、「無」(三四・六)、等の言回しがある。

右の「何爲」(三三・六)であるが、腋が「ナンスレゾ」と訓む理由が『改正讀書點例』⁽⁹⁾に、次の如くある。

是フルク古語ヲ以テヨミタルガ、タマサカニ残り傳ハレルナリ、中古ナラバ、イカニスレバカト云ヘキ事ナリ、スレバカヲスレゾト云ハ古語ナリ、スレゾハ、スレバゾト云事ナリ、

漢文訓読の歴史は古く、和漢の学に通じた腋ならではの見解である。『訓点語辞典』⁽¹⁰⁾にも訓点語彙の一つ「ナ(二)ズレゾ」として取り上げられてゐる。

しかし、後藤点では「何爲」字を「ナニヲシテカ」と訓む。この例のやうに漢文訓読の言回しにはひと言で説明しきれない点があるけれども、ここでは『論語参解』が後藤点とは少し異なった訓みをする文末の言回しを取り上げて、その用例を検討する。次の通りである。

1 「誰為」(一四四・三)

後藤点は文末の「為」字を「タメニセン」と訓む。『論語参解』では「為ニカセン」と後藤点に無い係助詞「か」が添加されてゐる。原文の意味が疑問ではなく、より意味の強まった反語であることを、係助詞「か」を添加することにより明確にしてゐるのである。

2 「已^シ 矣乎^カ」(七四・六)

後藤点は「ヤンヌルカナ」とある。完了の助動詞「ぬ」の連体形「ぬる」に終助詞「かな」が付いたものである。『論語参解』では「已^シンナンカ」と後藤点に無い推量の助動詞「む」が添加されてゐる。この原文の意味が未来を推量しながらの孔子の言葉であるから推量の助動詞「む」を添加したのである。

3 「已^{ヤン}而^{ネヤ}」(二四六・五)

後藤点は「ヤンナン」とある。「ナン」は完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「む」が付いたものである。それに対して『論語参解』の「ネヤ」は完了の助動詞「ぬ」の命令形「ね」に係助詞「や」が付いたものである。命令するのではなく「已めた方がいい」と孔子に願望、希求する楚狂接輿の気持ちを表現するために係助詞「や」を添加したのである。ここを後藤点のやうに「ナン」と訓むと古典語として意味が曖昧になる。

4 「仁^カ速^ク乎^ヤ哉^カ」(一〇一・四)、

「多^{ナク}乎^ヤ哉^カ」(一一〇・二)、

後藤点は「トフカランヤ」、「タナランヤ」とある。「ンヤ」は推量の助動詞「む」の終止形「む」に係助詞「や」が付いたものであり、意味は疑問である。『論語参解』の「メヤ」は推量の助動詞「む」の已然形「め」に、係助詞「や」が付いたものである。係助詞「や」が活用語の已然形に続き文末にあるとき、意味は反語になる。「メヤ」と訓んで意味を反語にした方が「仁が速くないこと」、「君子が多能である必要はないこと」をより強調した言ひ方になるのである。

助詞「や」ではなく「かも」であるけれども、『古今和歌集』「仮名序」の「いにしへを仰ぎて今を恋ざらめかも」と同じ用法である。

三 字訓

拙論「鈴木服『論語参解』の割注の言葉」に於いて課題としておいた「浸潤之譚」の「シコツリ」といった字訓を、ここで検討する。

先づ、「字訓」についてであるが、『論語参解』に於いて、たとへば「大」(七五・七、「雍也第六」第二章)や「浸潤之譚」のやうに、訓読に際して、原文の漢字の右側に片仮名の小書きで「ハナハダ」、「シコツリ」などと、漢字「大」、「譚」に直接付訓された「ハナハダ」、「シコツリ」といふ片仮名をここでは「字訓」と呼ぶこととする。「君子」(一一・二)の「ハ」や、「賢」(一四・七)の「トシテ」、「ヲ」や、「學」(一五・八)の「フトキハ」などの助詞・助動詞・用言の活用語尾、補読語、いわゆる「送り仮名」とは区別する。

ただし、助詞や助動詞でも、漢字に直接付訓されたもの、たとへば、格助詞「が」が付訓された「之」(四七・六)、助動詞「じ」が付訓された「不」(七五・六)等については「字訓」とする。

『論語参解』における右の如き字訓を調査すると二七六例ある。この二七六例すべての字訓について検討すると、服がその字訓を付けた理由、また、その字訓の性格が六つに分類できる。それをA～Fとして、次に説明する。

A 『論語』の原文の漢字を誤字とした場合に付けた字訓

『論語』の原文の漢字が誤字であると脛が判断した場合、その原文の漢字は訂正せずに、脛が正しいと考へる漢字の訓みを字訓に反映させてゐる。そして、割注でその理由を説明するのである。用例を割注と共に示すと、次の通りである。

- 1 「孝」^{オチニ}（三三・九）の割注は、「市川鶴鳴云ク、孝ハ考ノ誤ナルベシ、父ノ古語ナリ」、
 - 2 「直」^{トク}（八三・四）の割注は、「韓退之云、徳ノ誤ナリ」、
 - 3 「坦」^{ツネニ}（一〇三・八）の割注は、「是ハ必恒字ノ誤ナルベシ」、
 - 4 「始」^{オサムル}（一一二・一）の割注は、「始ハ決シテ治ノ字ノ誤ナルベシ」、
 - 5 「嗅」^{ハウチチ}（一四〇・一）の割注は、「劉勉之云ク、嗅ハ臭^{キウ}ノ誤ナルベシ、羽タ、キヲスルナリ、爾雅ニ見エタリ、トイヘリ」、
 - 6 「哉」^{ツレヨリ}（二九四・一〇）の割注は、「此字皇本ニ我トセルヨシ」、
 - 7 「徳」^{エテ}（二二六・七）の割注は、「得ノ誤ナリ」、
 - 8 「施」^{ステ}（二五〇・八）の割注は、「陸本ニ弛トアル、善シ、」、
- なほ、右の八例の中で、2「直」、4「始」、6「哉」には、字の左下に圈点が付けてある。

B 訓みを付け替へた字訓

脛は訓読には雅語（古語）を使用することは以前論じた。ここでは脛が考へるその雅語（古語）に訓みを付け替へたと言へる字訓である。次の通りである。

1 「不亦説オムカシカラ一乎一」(九・五)、

「子説オムカシミエフ」(六二・一〇)、

先づ、1の最初の用例は『論語』巻頭（巻第一・学而第一・第一章）の原文「子曰、学而時習之、不亦説乎」の後半部分である。後藤点は「ヨロコハシカラズヤ」と訓む。

ところが『論語参解』では「オムカシ」と訓む。脛はその割注に「古来ヨロコバシと訓ムコト、ココニテハ叶ハザル故に新ニ訓ヲ付カヘタリ」(九・八・左)とする。

また、『改正讀書點例』の「悦ノ字」の項にも、「カク讀カヘタリ」と、次の如くある。

○悦エツノ字 言偏ベンニモカク、ヨロコバシト讀ムハ、俗ニ云、ウレシイナリ、ヨロコブハ、ウレシガルナリ、コレハ後世ノ字義ナリ、論語、不亦説ムカシカラ一乎ハ、ヨロコバシニテハ義タガヘル故ニ、今、カク讀カヘタリ、ムカシハオモムカシニテ、愛好欣慕ノ心ナリ、……(中略)……メツルモムカシノ類ニテ感心シ、戀慕スルナリ、

右にあるやうに、「説」字を『論語参解』で「メツ」と訓む三例を次に挙げる。

2 「説メテ」(一四二・六)、

「説」^{メテシメ}「(一七九・一一)、

「説」^{メテシムルニ}「(一七九・一一)、

後藤点はすべて「ヨロコブ」と訓んでゐる。

次は、後藤点では音読み、『論語参解』では訓読みしてゐる用例をあげる。これも暇が雅語(古語)に「訓みを付け替へた字訓」の一種と考へる。十二例あり、次の通りである。「ハナハダ」、「カタンズ」、「シコヅリ」の如き字訓が含まれる。

3 「大」^{ハナハダ}「(七五・七)、「齋」^{モノイミ}「(九四・四)、

「綱」^{イトセ}「(一〇〇・三)、

※右の用例は、二訓併記されてゐる。後藤点は「カウセ」とある。

「宿」^{ネトリヤ}「(一〇〇・五)、「慈」^{オソル}「(一〇五・一)、「間」^{ヒマニ}「(一二二・八)、

「齊」^{モスツラ}「(一三一・九)、「親」^{シヤシヤク}「(一三九・七)、「認」^{カケシズ}「(一五六・九)、

「諧」^{シゴツリ}「(二五八・五)、「懇」^{ウタヘ}「(二五八・五)、「賢」^{マサレル}「(二九四・一〇)、

次は、『論語参解』と後藤点とが共に訓読みするが、その訓読み相違のある用例である。たとへば「言」字を後藤点では「コト」、「論語参解」では「コトバ」、「誰」字を後藤点では「タレガ」、「論語参解」では「タカ」と訓む如き用例である。二十九例ある。

4 「言」^{コトバ}「(二〇〇・一一)、「尤」^{トカ}「(三二・二)、「禦」^{フセクニ}「(六二・六)、「朽」^{スル}「(六五・五)、

- 「施ユルフル」〔七三・一〇〕、「雖イフ」〔七八・五〕、「舍オカメ」〔七八・六、一六九・一〇〕、
 「復カヘサフ」〔七九・一〇〕、「否シカラヤラン」〔八六・五〕、「舍オカトキハ」〔九二・一一〕、
 「云爾シカクド」〔一〇二・九〕、「正唯マサニカル」〔一〇二・一〇〕、「致オホメ」〔一一五・二〕、
 「選ノズテ」〔一二二・一一〕、「沾ウル」〔一三五・五〕、「集キル」〔一三九・八〕、
 「誰タカ」〔一四四・三〕、「殺シセンニハ」〔一五〇・九〕、「復フムラ」〔一五四・一一〕、
 「偃ノヘフス」〔一六三・一一〕、「病ツカレテ」〔一〇四・二〕、「慍イキトホリ」〔一〇四・三〕、
 「毀ソコナハルハ」〔一二九・一一〕、「為ナラン」〔一三一・一〇〕、「棄スクリナリ」〔一三六・六〕、
 「或モシクハ」〔一三七・六、一六〇・二〕、「甘アマンセ」〔一四〇・四〕、「階ハシカサテ」〔一六一・二〕、
 「尊アカワス」〔一六五・七〕、

C 『論語』の原文の解釈に諸説のある場合の字訓

「温故知新」は『論語』から出た四字熟語であるが、「温」字を古注では「温める」、新注では「尋ねる」、服は「継ぐ」と解釈する。このやうに『論語』の原文に諸説がある場合、『論語参解』には必ず字訓が付けてある。その字訓を示せば、次の通りである。便宜的にこの用例には『論語参解』の頁数・行数の下に、『論語』の篇・章を示す。

- 1 「不イキトホリ慍」〔一〇・一〕、「学而第二」第一章、
- 2 「道ミチ」千乘之国チヤムルニ〔一一・一一〕、「学而第一」第5章、

- 3 「易^{アヤトリ}色^ヲ」(二四・七、「学而第一」第七章)、
- 4 「一言以蔽^{サケム}之^ヲ」(二三・六、「為政第二」第二章)、
- 5 「以^{モチフル}」(二八・一〇「為政第二」第十章)、
- 6 「温^{ツイデ}故^ヲ」(二九・五、「為政第二」第十一章)、
- 7 「里^{ブル}仁^ニ」(五〇・三、「里仁第四」第一章)、
- 8 「加^{クシテ}我^ニ數年^ヲ」(九六・八、「述而第七」第十六章)、
- 9 「子路共^{ムカフ}之^ニ、三^{タビ}嗅^{ハク}而作^ス」(一四〇・一、「鄉党第十」第二十三章)、
- 10 「參^{シヤクタル}」(二〇五・一〇、「衛靈公第十五」第六章)、

D 国語の文法に関する字訓

先づ、敬語に関する字訓を挙げる。『論語参解』の敬語法については以前論じた⁽¹⁵⁾。次は、⁽¹⁶⁾ 腹の敬語法の見解を示すために付けた字訓である。

- 1 「父^{アハレハ}在^ス」(二八・二)、「在^{イマス}」(一五〇・一)、
- 2 「見^{アハス}之^ヲ」(四八・一〇)、
- 3 「曰^{ノクマハク}」(三三・六、一六〇・七)、
- 「謂^{ノハク}」(四九・三)、

※「ノ（タマ）ハク」で、語中の「タマ」が省略されてゐるが字訓としてここに挙げた。

「言」^{イコト}「(六六・五)」、「言」^{コト}「(一一七・三)」、

「道」^{ミチ}「(一九四・八)」、「道」^{ミチ}「(二二三・七)」、

4 「之」^ノ「(六一・三、九〇・三、一一二・一、一一九・二、二二六・七、二二六・七、二二二・四、二二六・一〇)、

「之」^カ「(四七・六、七七・三、八二・五、八二・六、一〇三・三、一一二・一、一四六・七、二二二・一、二二二・四、二三六・一、二四〇・七、二五四・一)」

「之」^カ「(八二・一、一一二・九、一四六・七、二二二・一、二二二・四、二四七・三、二五四・一)」、

※字訓「カ」は、濁点が付いてゐないが格助詞「が」である。

次に、「為」字の字訓であるが、後藤点は「為」字をサ行変格活用動詞「す」と訓むことは以前論じた。⁽¹⁶⁾『論語参解』は後藤点と同じく「為」字を「す」と訓む。次の通りである。

5 「為」^{セン}「(二〇五・二)」、

「爲」^シ「(三一・七、九九・一〇、二六〇・一一)」、「為」^{シキ}「(一五〇・四)」、

「爲」^{スト}「(三三・一一)」、

「何爲」^{シスレシ}「(三二・六)」、

『論語参解』が「セン」、「シキ」と訓む用例を後藤点と比較すると、後藤点は推量の助動詞「む」、過去の助動詞

「き」は使用しない。このことは『論語参解』は時制に関する助動詞を使用して後藤点よりも細かな配慮のもとに訓読してゐることが指摘できる。

また、『論語参解』が「スト」と訓む用例を、後藤点は「スルト」と訓む。古典語の文法では引用の「と」は終止形に接続するので、『論語参解』の方が文法的にも正しいと言へる。

時制に関する字訓では『論語参解』は打消しの推量の助動詞「じ」を使用する。後藤点では使用しない。次は『論語参解』で「じ」と訓む用例である。

- 6 「不^ジ」(七五・六、九五・一〇、一五〇・一〇、一六三・五、二四五・六、二四七・一〇)
「不^シ」(九三・六、一七五・九、二四七・一〇、二五八・九)

次は、その他の字訓をあげる。

- 7 「死^シ而^モ」(九三・五)、
8 「去^ズ」(四五・六)、前章(二C)で触れた。
9 「已^ヤ而^レ已^ハ而^レ」(二四六・五)、前章(二D3)で触れた。
「舍^{オカメヤ}」(七八・六、一六九・一〇)、前章(二D4)、本章(三B4)で触れた。

E 漢文の助字に関する字訓

『論語参解』はすべての助字に対してではないが、字訓を付けてゐる。たとへば、再読文字「将」を再読しない

場合や、「與」字の如く「か」「や」「よりは」「くみす」と種々の訓読がある場合などである。この字訓を後藤点と比較すると、共通する用例と相違する用例がある。

先づ、『論語参解』と後藤点とが共通する用例を挙げる。次の通りである。

- 1 「將」^{ホトシド}「(二一九・八)」、「猶」^{トシク}「(二六六・二)」、「固」^{モトヨリ}「(一九七・一一)」、
- 2 「與」^{ヨリハ}「(三八・九、一〇三・六、一二三・一)」、「與」^{クニス}「(一〇〇・一〇)」、
「與」^カ「(七〇・一、一〇八・九、一一九・六、一六二・三)」、「與」^ヤ「(二一九・一一)
- 3 「也」^{ノミ}「(二二・三)」、「而」^シ「(二七・一〇)」、「已」^{ノミ}「(三二・四、四一・一)
- 4 「也」^{ノミ}「(三一・四、一二二・五、一二六・五、二四四・三)」、「也」^{ノミ}「(八七・二〇)」、
- 5 「乎」^ヤ「(六三・八、六九・一〇、七〇・六、七五・六、八一・九、一二四・七、一六六・四、一八七・九、
二二二・七、二三五・五・二箇所、二四二・二、二四二・一一)」、
「乎」^カ「(二八・三、七五・八、八六・一〇、九八・八、一一九・一〇、一四九・一、一四九・二、
一七八・三、一八九・二)」、
- 6 「乎」^カ「(二二五・一〇、一五九・一一、二〇八・一一)
- 7 「夫」^カ「(八〇・七、一一一・一)」、「夫」^カ「(八六・一、九三・二)」、
「哉」^ヤ「(二二〇・二、一八五・三・二箇所、二〇五・二、二三二・一〇)」、

「哉」(一二三・八)、

8 「兮」(二四六・三・二箇所)

次に、『論語參解』と後藤点とが相違する用例を挙げる。次の通りである。

1 「且」(二四・一、七八・五)、「曾」(二八・三)、「所以」(五六・五)、

「寧」(二三・一)、「如之何」(二四六・五)、「奚」(一九〇・一一)、

「而」(二四七・五)、

2 「為」(九四・八)、「為」(九五・二)、「為」(九七・四)、

3 「諸」(二三・五)、「諸」(二四九・三、一六一・一、二〇一・五)、

「諸」(八七・五)、「諸」(二〇三・一)、※二訓併記されてゐる。

「諸」(四二・一)、「斯」(二二八・四)、「斯」(二二五・五)

4 「何謂也」(二六・五、四〇・八、四三・六、五七・一)「也」(七八・八)、

5 「乎」(四七・七、五六・八、七五・六、二二三・四、一八七・四、一九三・一〇、一九三・一一、

一九五・三、一九六・三)

「乎」(五八・一、七四・六、一八七・五、一九四・一〇)、「乎」(二五七・六)

6 「夫」(二二六・一・二箇所、一九七・一、二二三・七)、

「夫」(二二九・九、一四五・一、一八四・二、一九四・一〇)、

7

「哉」(四七・六)、

「哉」(一七〇・六)、※二訓併記されてゐる。

F 読みにくい漢字への字訓

全二七六例の字訓の中で、これまで挙げなかったものを次に示す。そのほとんどは後藤点と一致してゐる。これは眼が雅語(古語)と認め、かつ、『論語』の中で読みにくい漢字の字訓、注意を喚起するために付けた字訓である。

「復」(一九・八)、「視」(二八、一〇)、「覲」(二七・一一)、「行」(三四・六)、
 「亡」(三九・五)、「謂」(三九・一一)、「絢」(四〇・七)、「監」(四四・一)、
 「好」(四七・一一)、「古者」(五八・七)、「誅」(六五・五)、「懷」(七四・四)、
 「訟」(七四・七)、「周」(七七・四)、「罔」(八五・八)、「矢」(八六・四)、
 「厭」(八六・五)、「不復」(九二・二)、「告」(一〇一・一一)、
 「純」(一一八・二)、「縦」(一一九・八)、「少」(一二一・五)、
 「作」(一二一・五)、「攝」(一三一・九)、「没」(一三一・一一)、
 「袷」(一三三・二)、「側」(一四五・九)、「承」(一五六・三)、
 「上」(一六三・一〇)、「末」(二〇〇・二)、「見」(二〇五・一〇)

「病」^{ウレフ}（二二一・二）、「没」^{フヘテ}（二二一・四）、「横」^{ヒツ}（二一九・一一）、
 「婦」^{オケル}（二二九・四）、「以」^{キテ}（二三二・五）、「亡」^{ナカラシ}（二三七・七）、
 「矜」^{クワシハ}（二三七・一〇）、※後藤点は「キヤウハ」とある。
 「没」^{フキ}（二三九・一一）、「免」^{ハナル}（二四〇・八）、「行」^{サル}（二四五・七）、
 「以」^{ハトシモニカ}（二四七・四）、「施」^{ステ}（二五〇・八）、「亡」^{ナシト}（二五三・六）、

四 符号

『論語参解』に於いて独自の返り点の付け方をしているところがある。また、江戸時代の他の訓法と同様に、
 合符「賢」人（九五・六）、訓合符「多」見^チ（三二一・二）、訓読符・音読符「疾病」^{イヤリ}（一〇二・一一）等の符号を
 使用してゐるが、その符号を使用して服独自の訓読を示してゐるところがある。ここでは、そのやうな符号につい
 てAとDの四つに分けて説明する。

A 返り点

『論語参解』に於いて独特の一・二点、上・下点の付け方をしている用例を挙げる。次の通りである。

- 1 「子張問^シ十世可^シ知也^ヤ」（三四・八）、

- 2 「女與_ニ回也_ニ孰_レ愈_{ラシ}」(六四・七)、
- 3 「魯無_ニ君子者_ニ斯焉_ニ取_レ斯_ヲ」(六一・九)、
- 4 「有_下三_上年_ニ之_レ愛_上於_レ其_レ父母_ニ乎_ニ」(二四〇・一〇)、

次の二例は、訓合符と同じく字間の左側に傍線があるが、「わがとにあらざ」、「そのしんにしかんや」と訓み、訓合符ではない。現在では一二点を施すところを訓合符とレ点を組み合わせさせて返り点としてゐる。ちなみに後藤点はこの二例とも一二点を施してある。

- 5 「非_レ吾_レ徒_ニ也_ニ」(二四七・八)、
- 「如_レ其_レ仁_ニ」(二八九・五)、

B 音合符(字間の右側、または、中央)

- 1 「郷_レ人_ニ」(四四・六)、後藤点は「スウヒト」である。
- 2 「往_レ者_ハ」(二四六・四)、後藤点は「ユクモノハ」である。
- 3 「回_レ也_ニ」(二四四・八)、後藤点は「クハイハ」である。
- 「赤_レ也_ニ」(二五四・八)、後藤点は「セキヤ」である。

1は音合符と共に「ジン」と字訓も付けてある。2・3は音合符のみで訓みを示したものである。3の「也」字は、『改正讀書點例』の「ヤトヨミテ、宜シキ所⁽¹⁾」としてゐるものであり、胤は「ヤ」と訓むが、後藤点は訓みが

一定せず揺れてゐる。

C 音読符（右側）

後藤点は訓読みしてゐる用例を、『論語参解』では音読符が付いて音読みするものが十四例ある。次の通りである。

- 「因」^イ（二〇・四）、「私」^{スル}（二八・八）、「攻」^{スル}（三一・四）、「寢」^ス（六五・一）、
「希」^{ナリ}（七二・三、一五三・一）、「角」^{ナラバ}（七八・五）、「亡」^{セリ}（八〇・六）、
「晝」^{セリ}（八一・四）、「苗」^{ニシテ}（一二五・一）、「辱」^{スルコト}（一六六・一）、
「世」^{ニシテ}（一七四・七）、「述」^{セシ}（二三九・一）、
「説」^ス（二六四・五）、※音読符は「メ」の誤、「ス」は「ツ」の誤で、「メツ」と訓むところか。

次は、『論語参解』と後藤点と両者共に音読みする用例である。

- 「往」^リ（二〇一・三）、「病」^{ナリ}（二〇二・一）、「病」^{ナリ}（二二二・八）、
「予」^リ（二四〇・七）、
「煥乎」^{トシテ}（一一三・九）、※後藤点は熟語として「煥乎」^{クハシコクナリ}と訓む。

前述の「三B」訓みを付け替へた字訓^①では、『論語参解』の方が後藤点よりも訓読みすることが多かったけれども、ここでは逆の結果となった。その理由は明らかではない。

D 訓合符（字間の左側）

1 「若^{わか}人」(六一・八、一八三・一〇)、

『論語參解』は訓合符と共に「カ、ル」と字訓がある。後藤点は「カクノコトキ ヒト」とある。

2 「如^{ごと}之^の何^ん」(二五六・六)、「如^{ごと}之^の何^ん」(二六〇・七)、

「如^{ごと}之^の何^ん」(二四八・八)、「如^{ごと}之^の何^ん」(二五四・二、二六一・七)

『論語參解』は「如^イ之^カ何^ン」(二四六・五)と訓む字訓の用例がある。よって、ここは訓合符を使用して「イカン」と訓み、「之」字は不読である。後藤点はすべて「之」字を「コレヲ」と訓んでゐる。

3 「而^い已^え矣」(二一七・一〇)、後藤点は「シテ ヤム」と訓み、訓点が相違する。

五 終はりに

この結果については、すでに概略述べておいた通りであるが、ここではそれに補足を加へて結論としたい。

『論語參解』の訓読は、江戸時代の一般の訓読法では使用しない丁寧語の「侍り」といふ和語を使用したり、「シコツリ」、「カタンズ」、「オムカシ」、「メツ」、「カヘサフ」、「キル」、「スタリナリ」等の雅語（古語）を使用してゐる。語法では、「禮ノ和ヲ用テ貴ト為ル」の如く、主格の「の」が上あるとき結びは連体形になるといふ和文の語法を使用する。また、『論語』の原文の解釈に諸説のある場合、「サダム」や「ツイデ」等、服の独自の字訓を付け

てゐる。

以上のやうに、鈴木腹が自らの訓読に於いて、それまでの漢学者の思ひ至らないやうな語彙、語法を使用したことは、大胆であり勇氣のある態度であると思ふ。それは和漢の学を兼ね備えた学者としての相当な自負があったのではなからうかと想像するところである。

また、江戸時代の一般の訓読法では使用しない打消の推量の助動詞「じ」や、過去の助動詞「き」を使用して時制を一致させたり、それまでの漢文の言回しに古典語の助詞・助動詞を添加して、適切な意味を補ったり、意味を明確なものにしたりしてゐる。『論語参解』の訓読はこまやかな古典語の配慮に基づいた訓読法であると思ふ。

これは『論語参解』の訓読が、『論語』の原文の意味をより正確に理解できるやうにしたいといふ腹の熱意と態度の現はれであり、国語学の素養を駆使できた腹であるから生まれた訓読法であらう。

さらに、『論語参解』の訓読の特徴の一つに、訓読みする語が多いことが挙げられる。「蒺」や「愬」といふ難しい漢字は、後藤点は「シ」、「ソ」と音読みするが、『論語参解』では「オソル」、「ウタへ」と訓読みする。また、「言」字は両者共に訓読みであるが、後藤点は「コト」、「論語参解」は「コトバ」と訓む。訓読みの言葉も腹の言葉の吟味を経たものであると言へる。

しかし、後藤点が訓読みする語を『論語参解』ではわざわざ音読符を付けて音読みさせるところがある。この理由はまだ明らかではない。

最後に、『論語参解』には『論語』の原文の漢字に二訓併記で訓が施されてゐるところがある。これは脛が訓を決めかねたときに取る方法である。また、『論語』の原文の漢字が誤字であると脛が判断した場合、その原文の漢字は訂正せずに、脛が正しいと考へる漢字の字訓だけを付けてゐる。この態度は脛の学者としての誠実な人柄が偲ばれるところである。

以上、この論文では、鈴木脛の漢学の業績とされる『論語参解』の訓読は、脛ならではの国語学の素養に溢れた語彙・語法・字訓が使用されてゐるものであることを明らかにし得たと思ふ。

〔注〕

- (1) 『論語』の篇・章は、金谷治訳注『論語』岩波文庫本に拠る。昭和五十二(一九七七)年八月
- (2) 『大学参解・論語参解』(鈴木脛著作集經學篇) 昭和五十六(一九八一)年八月 鈴木脛学会 鈴木脛『論語参解』は、文政三(一八二〇)年に刊行された。
- (3) この論文で引用する後藤点は、全て『嘉永新刻 論語 後藤點 片假名附』を使用する。架蔵。
- (4) 松浦貞俊・石田穰二訳注『枕草子 上巻』角川文庫 昭和五十二(一九七七)年八月 一五頁。
- (5) 石川洋子『論語』巻第一の訓読の変遷について』『同朋文学』第三十一号 平成十五(二〇〇三)年三月 七三頁。
- (6) 荻生徂徠・小川環訳注『論語徴一』東洋文庫五七五 平成六(一九九四)年三月 平凡社 四五頁。
- (7) 石川洋子「鈴木脛の漢文訓読における敬語法について」『同朋国文』第二十四号 平成五(一九九三)年三月
- (8) 石川洋子「鈴木脛の訓読法について」『文莫』第十八号 平成五(一九九三)年十一月 鈴木脛学会 三四頁。
- (9) 鈴木脛『改正讀書點例』天保七(一八三六)年刊 『改正讀書點例』は『文莫』九号所収の影印本による。『文莫』九号 昭和五十九年七月 鈴木脛学会 一〇八頁。

- (10) 吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅之編『訓点語辞典』平成十三(二〇〇二)年八月 東京堂出版
- (11) 佐伯梅友校注『古今和歌集』岩波文庫 昭和五十九(一九八四)年十一月 二二二頁。
- (12) 石川洋子「鈴木胤『論語参解』の割注の言葉」『文莫』第二十八号) 平成十八(二〇〇六)年六月 鈴木胤学会
- (13) 注(12)と同じ。三頁。
- (14) 注(9)と同じ。一〇二頁。
- (15) 注(7)、注(8)と同じ。
- (16) 石川洋子『為』字の訓読について―『ス』から『ナス』へ―(『同朋大学論叢』第六十九号) 平成五(一九九三)年十
二月
- (17) 注(9)と同じ。一一三頁。